

中国武術のグローカリゼーション —日本における中国武術の受容と変容を事例に—

スポーツ文化研究領域

5014A042-1

劉 暢

研究指導教員：志々田 文明 教授

本研究の目的は、日本における中国武術の受容と変容を明らかにし、中国武術の将来の発展方向について以下の二つの課題を検討することを通して中国武術の将来の発展の方向性について提言することである。

- (1) 中国武術が日本という異文化の中でどのように普及され、変容されてきたのか。中国武術の普及の研究は従来発信側からの考察がそのほとんどを占めていた。本課題では中国武術がどのような過程を経て受容され、変容されるに至ったかについて考察する。
- (2) 中国武術が日本へ普及する際に直面した矛盾と日本側の対応。本課題では中国武術を受信側から見ることによって、中国武術が土着する過程のなかで遭遇する問題について考察する。特に競技ルールの変遷過程に見られる、日本武術太極拳連盟の指導者の武術的実用性をめぐる国際連盟への対抗関係を考察する。

第一章 新聞記事から見る中国武術

本章では、中国武術が日本という異文化の中でどのように普及され、変容されてきたのかについて分析する。本課題では新聞記事の報道を通して中国武術がどのような過程を経て受容され、変容されるに至ったかについて考察した結果、朝日新聞社、読売新聞社、毎日新聞社（以下「三社」と略記）の報道を以下の時期で分けることができる。

● 1897-1932 年：中国武術を提起

中国武術が初見するのは1897年の報道であり。1932 年までの 35 年間、三社における報道は合計

11 回見られ、その内容は主に清朝（1616-1911）の武術試験、義和団事件、遺跡の紹介、あるいは連載小説などを通して中国武術を提起していただけた。これらの記事と通じて「当時の中国に『拳法』あるいは『武術』と呼ばれる一種の武芸がある」ということを日本に伝えたと考えられた。

● 1938-1960 年後半：徐々なる普及

この約 30 年間の報道で中国武術は日本人にとって馴染みあるものを用いられながら紹介されていた。更にこの約 30 年間の間で中国武術の体育化、演技化に対する批判とその本質を問う記事が見られる。つまり日本に受容される前からすでにその形を変えながら普及していることが理解された。

● 1960 年代後半-1990 年代：健康太極拳の興盛

1960 年代後半から三社における中国武術に対する捉え方は従来の一種の外国文化の視点から、一種の健康法へと変わった。また、1979 年 12 月の記事で、太極拳が CM と他のスポーツの紹介に用いられたことから、太極拳はこのごろに日本に「土着」したと思われた。更に、1980 年代に入り、健康太極拳のブームが最盛期を迎え、従来の近代になって普及のために作られた新しい太極拳のみならず、陳式太極拳などの伝統型も日本で徐々普及し始めたことから、日本における「太極拳」という言葉の「中身」が少しずつ豊富になっていった。

● 1984-2015 年：健康の衰退と競技の新興

1980 年代半ばから、中国武術を健康の面から見る記事が徐々に減り、一方、一種の競技スポーツとして中国武術を捉える記事の割合が増えるよう

になった。そして、1990 年以後から今日まで競技の面と健康の面と比べれば常に前者から報道する記事の割合は常に後者より高い。また、両話題の関係は 1984-1993 年において負の相関性が見られるが、1994-2003 年ではほぼ関係性が見られない。そしてここ 2004-2015 年では高い正の相関が見られるようになった。さらに、競技と健康以外の話題に関して、2004 年前後から娯楽の面や文化の面から取り扱う記事も多く見られるようになる。近年では、三者の報道は中国武術をそのものの紹介というより、中国を知る媒介あるいは参照物として用いている。

第二章 近代化する中国武術-日本における「套路競技」の受容を事例に-

本章では以下のことが解明された。

1982 年中国側は明確に中国武術の世界的普及を目指し始め、1999 年から一種の競技スポーツとして変化した武術（ウーシュー）のオリンピック種目入りに重心を傾けた。そのため中国武術連盟と国際武術連盟は競技ルールの変更にかかったが、2003 年に発表された新しい競技ルールは日本武術太極拳連盟の強い反対を受けた。これまでのルールの変遷過程及び日本側が提示した修正案の分析を通して、日本武術太極拳連盟と国際武術連盟の間のコンフリクトは「難度動作」の導入による武術（ウーシュー）の実用性のさらなる喪失と競技性の偏重にあることがわかった。日本側はこのコンフリクトを解決するため、武術（ウーシュー）を「従来型＝伝統回帰」と「オリンピック型＝技術の高度化」に分け、並行発展する方法をとった。中国武術のこのような分化は、柔道や剣道にも見られる。そこで「国際スポーツ」と「民族スポーツ」の視点からアプローチした。中国武術、柔道、

剣道などの武芸に起きた分化の原因は、民族スポーツとして内包している民族文化性が、文化を越えた世界の諸民族にグローバル化する際に生じた文化の衝突にあると理解された。

第三章 中国武術の将来

本章では、以上の検討を経て、将来の中国武術の将来の発展の方向性について以下のように提言した。

第七回全国武術工作会議の内容と日本武術太極拳連盟の概要を分析した結果、中国武術の母国として、中国はより全面的かつ具体的な発展案を立てている。日中両方とも中国武術の普及を目指しているが、中国側は国内における普及のみならず、海外における普及のことも心がけている。それに対して、日本側は国内における普及により専念していると思われる。

中国武術の将来像としては二つの道がある。一つは、ひたすら「国外における国際化」を目指すテコンドーのような道がある。テコンドーのオリンピック競技化は愛好者の数を増大させ、巨大な商業市場を生み出し、多くの若者を興奮させる。しかし一方でその武術の実用性は薄れて華美となり、実用性の観点を切り捨てられる。

一方で、普及する範囲をたとえば国内に限ることによって人為的にコントロールすることで、武術自身の変容を最小限におさえるといった道がある。それは日本の相撲において行われている同化政策的な方法であり、「国内における国際化」の道である。しかし同化する主体自身もグローバリゼーションのなかで影響を受けて変容しており、武術自身の変容を抑えることの困難さはつきまとうだろう。中国武術は大きな岐路に立っているといえる。